

平成24年8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市梅郷四丁目の「琴平神社」参拝

青梅市梅郷四丁目の山頂に祀られている「琴平神社」へ、梅郷六丁目の夫婦沢に架かる明王小橋近くから参拝に向かう。

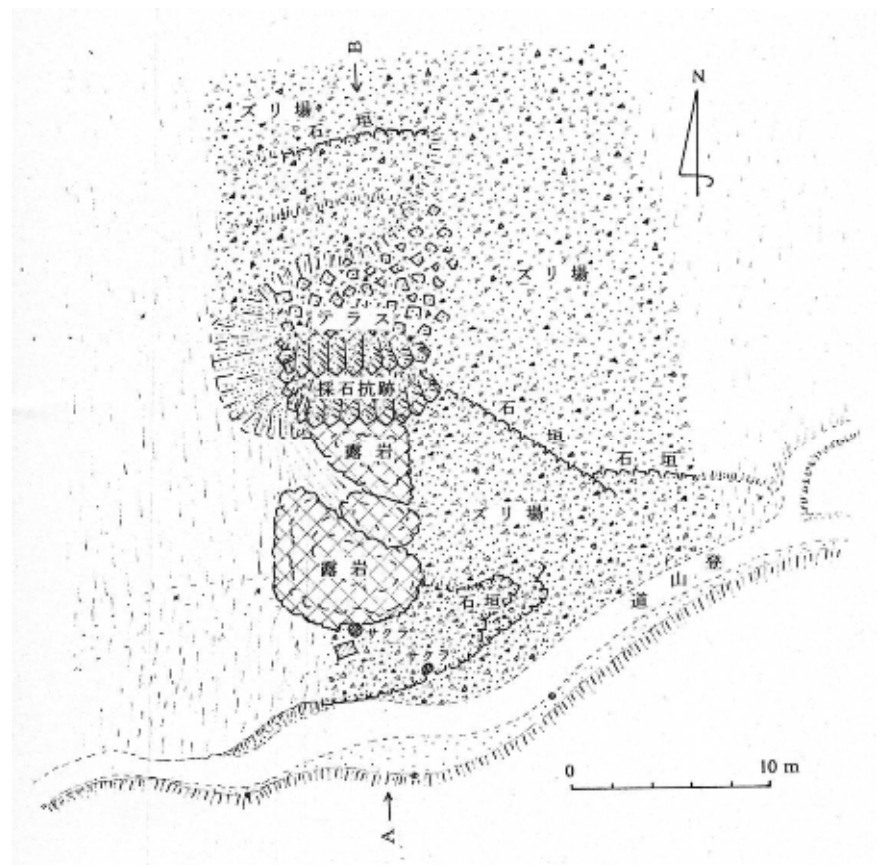
明王小橋を通る小道は鎌倉道で、橋を渡って北方へ向えば、即清寺の敷地を横切って軍畑大橋を渡し、成木や名栗を経て秩父盆地に着く。一方、南方へ向えば、梅郷うめがたを通って梅谷峠を越え、八王子や原町田を経て鎌倉に着く。

参道の入口には、鎌倉道の脇に石灯籠が建てられている。コンクリートの台座に乗る塔の全高は約 137.5cm で、もろい材質の砂質凝灰岩（五日市で産する伊奈石）である。正面に「愛宕山大□□」とあり、□□は権現と彫られているようである。右側面には、寛政十一年九月十五日と彫られているように見える。寛政 11 年は 1799 年である。左側面には「金毘羅大権現」、裏面には「牛頭天王」と、それぞれ縦一行で彫られている。

石灯籠の脇から参道を 20～30m進むと、右側の樹林の中に白い水槽が見える。水槽を設置する際の整地作業中、付近一帯から縄文時代中期前半から後半を中心とする、多量の土器や石器が出土し、「山かみとの神戸遺跡」と命名された。

参道は途中から狭くなるため歩き辛い、5～6分進むと稜線上に着き、そこからは歩きやすくなる。しばらく進むと、「ボッチ石」と称される場所に着く。

ボッチ石は稜線上に突出する、黒褐色の硬質粗粒砂岩から成る小丘である。小丘の頂上は道路面から約 6 m 高く、延長は 8 m 前後の岩体で、良く見ると周辺は切り取られ、低い石垣で囲まれている。小道から反対



第1図 ボッチ石付近の平面図

側へ足を進めると断崖絶壁で、高さ 20m前後で、数段の階段状になっている。絶壁の下段は、幅 10m前後、奥行き 10m前後のテラスとなっており、崖下の奥行き 3 m前後がいくぶん窪み、そこには一辺が 20～40cm の、矢穴の一部が残っている切石が散乱している。それを囲むように、数～十数 cm の碎石からなる土手状の凸地が延び、碎石が散乱している場所はズリ場で、谷底へ落ちないように、数段の石垣が設けられている。ここが採石場であったことは分かるが、施行者や採石された時期については不明である。

ボッチ石から先はさらに歩きやすくなり、途中には馬頭観音が祀られている。しばらく進むと、整地された敷地内に、二基の常夜灯が並べられている。

二基の常夜灯はほとんど同じ形態で、全高は約 187cm である。三段目の正面に「講中」、右側面には「下邑三郷」と 20 名前後の人名、裏面には獅子が半立体で彫られている。四段目の裏面には「天保十三壬寅年十月」と、縦に彫られている。天保 13 年は西暦 1842 年である。

明治 10 年代に書かれた『皇国地誌・下村誌』によると、琴平神社は大国主命と崇徳天皇を祭る。創建は不明で、かつては金毘羅大権現と称していたが、明治維新の際、琴平大神に改められたとある。展望が良い露岩の上に鎮座する金刀比羅神社の入口には説明板が掲げられている。

それには、

「沿革 当社は、梅郷を一望し、常に氏子を見守ることのできる、巖山の頂上に鎮座しており、古くは「金比羅大権現」と呼ばれていましたが、明治以降「琴平神社」と呼ばれるようになりました。

昭和の戦前まで当地は養蚕が盛んで繭の生産が氏子の生活の支えであり、経済の中心事業でありました。増殖豊産の産土神として崇敬されていた当社には、当時、繭の豊作を祈願する人が多く、繭の当たり年にはお礼に猫の焼き物が奉納されたものでした。猫の焼き物は、天敵であるネズミから蚕を、お猫様が守ってくれたお礼とも伝えられております。

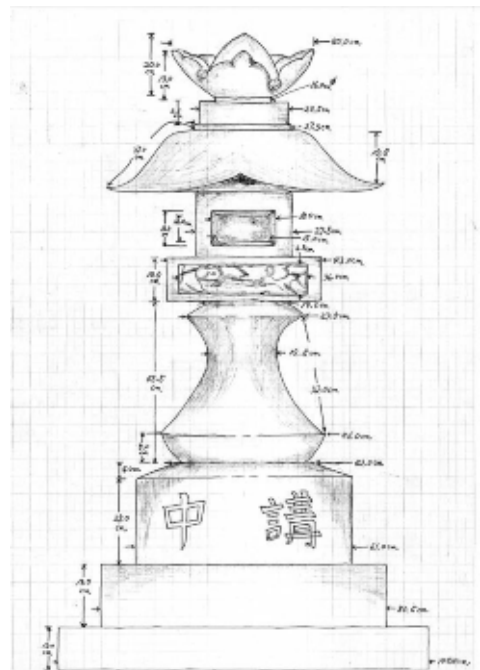
戦後も山頂の当社まで、商売繁昌を祈願に訪れる人が多く、新しい招き猫、現代的な招き猫がたくさん奉納されております。家運の隆昌を、祈願いたしましょう

平成二年八月」

と、書かれている。

建物は巨岩の上に建てられているため、前庭からの見晴らしが良い。心地よい風を受けながら下界を展望し、参道に戻る。

(文責 角田 清美)



第2図 常夜灯